0039-8985/19/¥250/論文/JCOPY


連載 スポーツ人類学的「空間文化論」-3

# 格闘する空間と創られる身体
## ー台湾先住民族の「土俵を持つ相撲」ー

渡邉 昌史

とっくみあい，そしてもっぱら投げによって相手を地面に倒そうとする競技を相撲という．相撲は，数多くある人類の格闘技の中でも最も古いものの代表格であり，地域と人類文化史上の段階を問わず，地球上の多くの民族によって行われている．なかには，オリンピック種目のレスリングのようにグローバル化したものもある．

これらの相撲のルールは実に多様である．たいていは立ち技で勝負を決するが，はじめる姿勢，身体のどの部位をとって組み合うか，そして，どの部位を地につければ勝ちとなるのかといった点について実にさまざまである．

相撲をとる機会・目的についても，日常の娯楽や競技会のみならず，新年祭，収穫祭，客人の歓迎，出産祝，成人式（割礼），葬式など多岐にわたり，善悪の判断のために神明裁判としての相撲も行われている．また，男だけに限らず，女同士の対戦もあり，男と女が相撲をとるところもある．さらには，目にみえない精霊と相撲をとる，傍目にはことわざの「独り相撲」のようにもみえる愛媛県大山祇神社御田植祭における一人角力もある．

相撲は相手が人間であれ，神々であれ，結果としての勝敗が確かに生じ，それに伴って身体能力の優劣が可視化されるのだが，身体能力を差異化させること自体が必ずしも目的ではないこともある．

### 1．台湾先住民族の「土俵を持つ相撲」

日本語で相撲というと，われわれは大相撲をイメージする．マワシ姿の力士が相手を土俵の外へ出すか，足裏以外を土俵につけさせれば勝ちとなる．相撲といえば土俵が付きものと考えがちであるが，日本の相撲（以下，日本相撲）に土俵が現れるのは江戸時代からのことであり，それ以前に土俵はなかった[注1]．そして，世界で行われている相撲もまた土俵を持たないとされてきた．

ところが，台湾先住民族プユマ[注2]で行われている相撲は，大相撲を「国技」と理解する日本人の目からすれば，大相撲とはいわないまでも，村相撲とみまごうかも知れない．なぜならば，そこで繰り広げられる光景は，腰にマワシを締めた男たちが「土俵」に立ち，押し倒しや投げることによって勝敗を決する相撲だからである．

台湾東部に居住するプユマでは夏に各地で収穫祭（豊年祭）が催されている．台東市知本でも毎年7月，1週間にわたって執り行われる「カバラサアーン」において相撲，徒競走，舞踊が実修されている．知本のプユマでは伝統を意識したとき，自らの集団名および祖先からの居住地名として母語による「カティプル（katatipul）」を用いることから，本稿でもこれに従い地名としての知本をカティプル，そこで行われている相撲をカティプル相撲と呼ぶ（写真1）．

筆者：わたなべ まさし（武庫川女子大学健康・スポーツ科学部准教授）

写真１　今日のカティプル相撲（2005年）

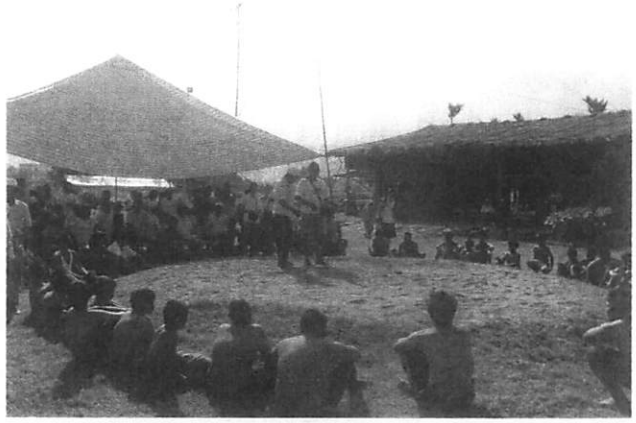

写真２　相撲に先立ち，伝統的祭祀が行われる
中央が「土俵」，右後方が復元されたパラクワン

収穫祭はカティプル文化園区を中心に開催され，相撲もここで行われる．そこには，伝統的施設「パラクワン（男子集会所）」が復原されていることから，もっぱら「パラクワン」と呼ばれる．

カティプル相撲には，プユマの小学生～20歳代前半までの男子が参加する．直径約6m，高さ30cmほどの円形に盛られた砂の内側にわら縄が丸く置かれ，これが「土俵」となる．「土俵」の表面は足が踝まで沈み込むほどに柔らかく，土をつき固める日本相撲よりも，むしろ韓国相撲のシルムや沖縄角力（シマ）に近い．服装は，平服から上半身のみ裸，裸足となり，高校生から上の年齢は白色の長いタオルを腰に巻く．

もっぱら互いに組み合ったり押したりして，相手の足裏以外の身体を地面に着けることによって勝ちとなる．ただし，勝負判定は審判の裁量に大きく委ねられている．

対戦にあたっては，両者が「土俵」中央に歩み出て，両手を着いた状態で静止した後，審判が開始を宣告することではじまる．組み合った両者は，相手の上腕をつかむか，もしくは相手の腰に手をまわし腰に締めたタオルをつかみ，腰に抱え込みようにして投げる．また，自分の足で相手の足を払い倒す，あるいは相手の足に素早く掛けて引き，相手を仰向けに倒すなど，投げ技で決着がつくことが多い．

「土俵」はあるのだが，外に押し出すことによって勝負が決することは，ほとんどない．これは柔らかな土俵の影響もさることながら，彼らにおいて技の価値を見た目の派手な投げ技に置いていること，観衆においても豪快な投げ技で明快に勝負が決することを好むことの双方が相乗効果となって現れている．そこには払腰，内股，大内刈，掬投，裏投など多彩な柔道の技を認めることができるが，その背景には，地元小学校で柔道が１年生から必修となっていることがある．

特筆されるのは祭祀の際，相撲場に「塩」をまくことである．開会に先立ち，伝統的司祭が相撲場に上がり，祭文を唱えながら小さな祭祀具とともに一掴みの塩を数回，大きくまく（写真2）．伝統的祭祀は収穫祭に限らず，１年を通してさまざまな機会でも行われるが，「塩」を用いるのは唯一，カティプル相撲このときだけである．

注１）日本における相撲，わけても大相撲は近代以降，国民国家における「国民」形成という政治的動態およびナショナリズム昂揚の中で，相撲節会に由来する「伝統」を再構成することにより，純粋な日本文化の身体的実践として創られてきたものである．

注２）台湾における先住民族とは，17世紀以降に中国大陸から漢民族が移住してくる以前から台湾島およびその周辺の島嶼部に居住していた集団である．2019年現在，先住民族の人口は約53万人で台湾の総人口の約2%を占め，政府に公認された先住民族は16族となっている．プユマはそのひとつ．

写真３　青年会館の前にて，伝統的衣装に身を包んだ青年たち
撮影されたのは1953年1月（中華民国暦42年）

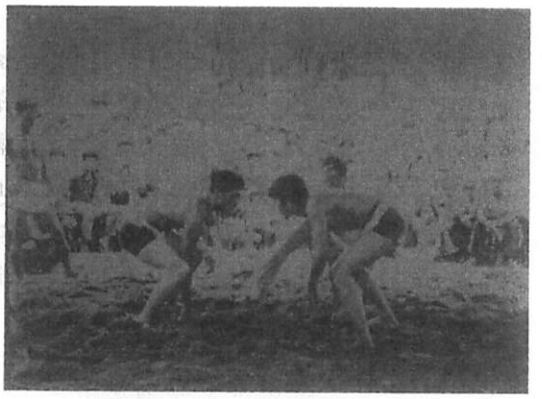

写真４　戦後すぐのカティプル相撲
1950～1960年代に撮影されたものか

## 2. カティプル相撲の文化変化

収穫祭におけるカティプル相撲は「固有伝統文化」として実修されている．外部社会からプユマに注がれる眼差しにおいても，プユマは台湾先住民諸族のなかでも「武勇を尊ぶ民族」として知られ，相撲はその文化的象徴となっている．

カティプル相撲を「伝統」とみなす認識は，筆者が2003年にフィールドワークを実施した当初からすでに存在しており，多くの古老がカティプル相撲は「昔から変わらずに行っている」と口を揃えたかのように語っていた．

これを否定するわけではまったくないのだが，筆者はカティプル相撲をみたとき，そこには日本相撲を構成する重要な要素が二重写しにみえて仕方がないのである．台湾は帝国日本が最初に植民地とした地域であり，1895年から約50年間に及んだ植民地統治の影響は今日でもなお直接的，間接的，あるいは有形，無形を問わずに現代台湾の精神文化，社会文化，物質文化の一部となっている．

そこで，相撲に限定せずに，社会生活全般に対しての聞き取り調査を重ねてゆく中で，最古老から，「もともとの相撲には『土俵』がなく，組んだ状態からはじめ，相手を組み伏せることによってのみ勝敗がつくものであった」という記憶がよみがえった．フィールドワークによって得られた情報からカティプル相撲の歴史的変化について，再構成すると次のようになる．

1世紀ほど前，相撲は母語で「マリウォリウォス」と呼ばれ，相手を倒すか，または組み伏せば勝ちとなる以外，特段のルールもなく，伝統衣装のハチマキを外して腰に結び，向き合った両者の合意によってはじめられていた．マリウォリウォスは，今日のカティプルの人々にはまったく記憶されていない．

組み相撲のマリウォリウォスが変化することとなった直接的な契機は，1930年代初めに伝統的木造建築のパラクワンがコンクリート造近代建築の青年会館（写真3）に代わり，そこに日本相撲の土俵が設けられたことであった．青年会館に土俵が出来たことにより，青年たちは日頃から日本相撲をとるようになった．

第二次世界大戦後，中華民国政府による中華文化をもとにした中国化政策によって，先住民族の文化は否定され，パラクワンも禁止・解散となり，相撲もとられなくなった．

同時期，知本ではカトリックが布教活動をはじめ，多くの信者を集めた．さらに青年層を取り込むために，娯楽としての相撲が教会，宗教的祝祭としての収穫祭で行われるようになった．当時の写真をみると，今日のカティプル相撲と同様の「土俵」上で，短いパンツを着用した上にマワシを締めた男たちが相撲をとっており，それを大勢の観衆が取り囲んでいる（写真4）．

1990年代に至ると台湾の独自性を強調する台湾本土意識の高まりの中で，エスニック集団の文化を取り戻そうとする動きが現われる．知本でもカティプル文化の復興に取り組むようになり，1997年には収穫祭が復活し，そこで相撲がとられるようになった．

## 3. 変化と不変の中にある本質

カティプル相撲をめぐって，プユマの「変わらない」とする語り，調査から明らかになった「変化」してきた事実，「不変」と「変化」この相反するともいえる位相の理由について，相撲が行われていた「空間」，相撲を行う「身体」，この2つの視点から解釈を試みたい．

伝統的なプユマ社会の特徴として，首長制と厳格な年齢階梯制およびパラクワンがあげられる．パラクワンは政治，軍事，集落祭祀の中心地であり，青年男子が寝食をともにし，年長者への絶対的服従と徹底した奉仕などの社会規範を教える場でもあった．そこでは相撲の強者が向かって左側，駆け足に優れた者が右側に分かれて寝起きしていた．相撲は駆け足とともに，「出草」（通過儀礼，宗教的行為としての馘首）のための鍛錬とされ，いずれの強者も尊称を以って呼ばれていた．これらのことは，カティプルにおける青年男子の価値がもっぱら相撲と駆け足，すなわち身体能力の優劣に置かれていたであろうことを教える．よって「伝統的な身体」の獲得のために相撲が重要性を帯びてくるのは必然的であったといえよう．

パラクワンに「土俵」が持ち込まれたのは，植民地統治政策によるものであった．台湾総督府（植民地統治における最高官庁）は，内地で国家統制下の末端組織として結成を進めていた官制青年団（伝統的年齢階梯制による若者組織と区別するために，ここでは官制青年団という）を台湾においても導入した．カティプルでは伝統文化におけるハード面としてのパラクワンが青年団に置き換えられ，ソフト面の倫理規範が「日本精神」として再解釈された．青年団では「心身ヲ修錬シ忠良ナル国民タルヲ期スルヲ目的」として，特に相撲が奨励された．

総督府は統治政策遂行の過程で，先住民族の身体能力を超人的なものとして畏怖していたが[注3]，その身体を日本統治末期には「戦う身体」として日本軍が利用した．先住民族は東南アジアの密林地帯において有用な戦力になると期待され，「日本人」として激戦地に投入され，多くの悲劇を生んだ．

戦後，急速に信者を増やしたカトリックによって，収穫祭が執り行われていた地に教会堂が建てられた．伝統的信仰の「空間」がカトリック信仰の「空間」に代わったことにより，収穫祭も行われなくなった．政府によってパラクワンが禁止されたことも重なり，カティプル相撲は2つの「空間」のいずれも失った．

だが，カティプル相撲は新たな「空間」を獲得した．カトリックである．カトリックにとって伝統的な収穫祭は，それが内包する宗教性ゆえに否定すべきものであった．これに対し，相撲は青年たちによる鍛錬として，あるいは「楽しみごと」としてとられていたのであり，何ら宗教的色彩を帯びていなかった．カトリックの祝祭としての収穫祭が教会で開催され，そこでカティプル相撲も行われていた．

今日の収穫祭で行われているカティプル相撲は，もともとは「土俵」を持たない組み相撲のマリウォリウォスであった．そこに日本の植民地統治政策によって日本相撲の受容があり，さらに戦後の社会状況の中での変化によって，今日みるカティプル相撲として形づくられてきた．カティプル相撲はこれをとりまく社会の変化の影響を受けて，絶えず変化し続けてきたといえる．だが，カティプルの人々の認識では相撲として重要な「身

注3）2011年公開の台湾映画『セデック・バレ』では，山野を疾走する先住民族の身体能力の高さが強調されている．

体能力の優劣を組み合って競争するための文化装置（特定集団の解釈の枠組みを決定づけている規範）」として機能していることは一貫しており，変化していない．ゆえに，カティプル相撲は相撲をとるという行為自体の意味としては変化していない．よって，そこに明確な区別意識は存在していないのである．

1980年代以降の民主化，台湾ナショナリズムの高揚の中で，台湾社会にとって「大陸」との差異化の主張のツールとして先住民族の存在，文化が積極的に利用されるようになった．カティプルでもカトリック主導でカティプル文化の復興がはじまり，すぐにカティプル文化発展協会が創設され，1997年からパラクワン（カティプル文化園区）を中心に収穫祭が開催されるにようになった．

カティプル文化の復興の過程について，2つの点から検討したい．1つは文化的アイデンティティをめぐる問題であり，もう1つは収穫祭が行われる空間性である．

カティプル文化の復興の過程において，収穫祭は脱カトリックを志向して，伝統文化としての本質性を求めたことによって正統化された．これに対し，収穫祭におけるカティプル相撲は，往時のマリウォリウォスへと回帰することはなかった．むしろ，カティプル相撲は日本の文化的影響も含む異種混交の文化としてあることによってカティプル文化としての真正性を獲得した．よって，カティプル相撲における「伝統」とは，過去に遡ってではなく，カティプルの歴史的経験の文脈の中で獲得されてきたといえよう．

パラクワン（カティプル文化園区）の地は，日本統治時代には小学校が置かれ，戦後はそのまま中華民国に引き継がれ，1949年の移転まで学校があった．その後，1990年代に政府より払い下げと補助金を受け，カティプル文化発展協会が伝統的施設の整備を進めてきた．よって，この地は伝統文化復興に重要な役割を果たしてきた世代において，日本統治時代からの現代までの「記憶」が集約されている場であり，カティプル文化の「聖地」ともなっている．

## 4. 文化を継承する身体

今日のカティプル相撲において，相撲をとるという行為そのものは，担い手である若者たちにとってみれば年に1度の収穫祭の機会に自身の身体的経験，すなわちスポーツ経験の裏付けによる伝統文化の追体験に過ぎないかも知れない．しかし，そこでは，パラクワンの「空間」の持つ歴史的経験としての「記憶」，相撲による直接的な「身体」への働きかけによって，カティプル文化が身体を通して若者世代へと伝達されてゆくこととなる．

カティプル相撲はカティプルの「記憶」と「身体」とを一体化させた歴史実践として，可視化という強い説得力とも相まって，「伝統文化をまとった身体」の次世代への継承を担保するために重要な役割を果たしているといえる．

［文　献］

寒川恒夫（1995）相撲の人類学．大修館書店
渡邉昌史（2012）身体に託された記憶―台湾原住民の土俵をもつ相撲―．明和出版．
渡邉昌史（2017）台湾原住民族のスポーツ身体言説―生まれつき優れているのか―．寒川恒夫編著，よくわかるスポーツ人類学．ミネルヴァ書房．

奥付



## 編集後記

温度差があるはずないが，熱かったり冷ややかであったりする．温厚な穏やかさや苛烈な侮蔑が暗に示される．温暖寒冷で表現される視線の両端となる瞳と対象の間に点線で生まれる．目は口ほどに物を云う．目線が結ぶ両人の間に明確なコミュニケーションが生じる場合もあれば，虚ろなでどんよりとした雰囲気が生起している状況もある．阿吽の呼吸で物事がすすんだり，退屈な授業時間が刻んだりといった風景が思い起こされようか．▼金子先生は凝視する顕在的注意を対照とする潜在的な注意に迫るべく，瞳孔変動，微小輻輳運動，微小眼振の３つの眼球運動指標と注意位置の刺激特性を関連付け，注意位置・状態の推定を目指す．▼七五三木先生らはスポーツ場面での視覚情報処理の仕組みを視覚関連領野ニューロンの受容特性をもって図説した後，アスリートにみるパルボ系とマグノ系の視機能の違いを言及する．▼安藤先生は周辺視野の定量化指標に反応時間と premotor time を取り出し，自転車エルゴメーターの運動の影響を踏まえながら，顎台での注視点の動態を分析する．この手法を低酸素環境下でのそれに伸展させると，高強度の運動中に，なぜ周りが見えなくなるのか，との疑問の解明につなげる．▼池村・林先生は運動中の眼球血流動態の応答を，①疲労困憊に至る前後の経過点，②静的ハンドグリップやスクワット運動といった運動様式の違い，③常温と暑熱の環境温の違いに求め，その調節機能や視覚との関係性に言及する．▼産賀先生はスポーツと眼外傷の関係を，眼球の構造と機能，起こり得る病態を解説した後，スポーツ種目別に頻出する外傷の特異性に応じる保護メガネのいくつかを紹介する．▼柴先生は加齢に伴う視機能および眼形態の変化，加齢に起因する眼疾患となる白内障・緑内障の現状に関して写真や図解にて丁寧に解説する．▼橋口・大嶽・伊佐野先生は視覚障害とスポーツのひも解きをブラインドサッカーに求める．終日，アイマスクを着用して生活してみればいい．果たしてそこにスポーツに挑戦する意欲が沸き起こるか否か．共生に向けて心理学的なアプローチが刺激を増す．▼特集論文の多くは現在進行中にて執筆者の先生方の熱意があふれる．▼連載「糖・脂肪代謝を高める力」では安藤先生がエネルギーバランスと脂質バランスの関係を基礎に，栄養素による代謝適応速度の違い，代謝適応による基質の予測的代謝をすすめ，時間栄養学的要件とメタボリックフレキシビリティの関連性への言及に期待を寄せ，連載「空間文化論」では渡邉先生が台湾先住民族に継承される土俵を持つ相撲・カティプルの文化変容を，植民地統治，中国化政策，カトリック布教にからめて追体験的に紹介し，新連載「運動イメージの神経基盤」では水口・彼末先生がニューロフィードバックと非侵襲性脳刺激法それぞれのイメージ図によってパフォーマンスを高めるイメージトレーニング法を論じる．神経基盤への接近に関心は高まる．（O.E.）


# 体育の科学　6

第69巻　第6号　2019年6月1日発行

定価（本体 1,050 円＋税）

2019年年間予約購読料
定価（本体 12,000 円＋税）
（年 12 冊・送料小社負担・約 4%割引）



［編集委員］
荒井 弘和（法政大学教授）
海老原 修（横浜国立大学教授）
勝川 史憲（慶應義塾大学教授）
木塚 朝博（筑波大学教授）
征矢 英昭（筑波大学教授）
田中 茂穂（国立健康・栄養研究所部長）
林　直亨（東京工業大学教授）
深代 千之（東京大学教授）

［編集協力］
一般社団法人 日本体育学会



編集者　海老原 修
発行人　太田 康平
発行所　株式会社 杏林書院
〒113-0034 東京都文京区湯島4-2-1
Tel　03-3811-4887
Fax　03-3811-9148
e-mail　taiiku@kyorin-shoin.co.jp
URL　http://www.kyorin-shoin.co.jp
編集部　佐藤直樹・齋田依里

印刷所　広研印刷 株式会社
広告申込　株式会社 メディカルプレーン
〒113-0033 東京都文京区本郷3-24-2
Tel. 03-3814-5980



・本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権（送信可能化権を含む）は株式会社杏林書院が保有します．
・JCOPY <（一社）出版者著作権管理機構 委託出版物>
本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています．複製される場合は，そのつど事前に，（一社）出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088，FAX 03-5244-5089，e-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください．